都市農地保全に向けて「武蔵野宣言」

先の11月３日（火・祝）に「川崎平右衛門フェスタin武蔵野市」を開催した。川崎平右衛門は江戸時代中期、八代将軍徳川吉宗によって行われた享保の改革の柱の一つ、武蔵野新田開発を成功に導いた。侍がいくらやっても武蔵野新田開発は進行しなかったが、押立村（現府中市）の名主で新田世話役に取り立てられた平右衛門は、農民の持つ力を引き出し、協同の力として発揮させ事業を成功させた。武蔵野新田開発の後、平右衛門は木曽三川の治水に当たり、さらに石見銀山の復興に当たった。これだけの大事業を成し遂げたにもかかわらず、あまりに知られていない平右衛門をもっと世間に知らしめようと立ち上げたのが川崎平右衛門顕彰会である。毎年、平右衛門ゆかりの地で平右衛門フェスタを開催し、今回が６回目となる▼新田開発が行われた武蔵野台地は都市化の波に押され、年々、農地は減少を続けている。２０１５年の都市農業振興基本法の成立により都市農地は「10年以内に宅地化すべき農地」から「ありうべき農地」へと位置づけは大きく変わった。その後、生産緑地指定後30年経過しても10年更新できる特定生産緑地制度の創設、生産緑地の貸借が可能になるなどによって〝２０２２年問題〟は概ねクリアはされた▼今回フェスタのテーマは「武蔵野市における農あるまちづくり」。目先の２０２２年問題はクリアできたとはいっても、農地を半永久的に保全できるには程遠い。フェスタでのリレートーク等をつうじて、都市農地は私有地であると同時に公共性発揮をも期待されているということで会場は一致。このため市民は、都市農地を半永久的に保全していく制度創設を国に働きかけていくとともに、地産地消、フードロスの抑制、農業参画、食と農の学習に市民も取組んでいくことを高らかに宣言した。（土着菌）